

子どもたちがつくる国連環境ポスター展

Workshop



Listening Together

地球への感性

創造的な鑑賞による学びの実践

好きな絵はどれですか？

気になる絵はどれですか？

1枚の絵をえらんでじっくり見てみよう。



はじめに

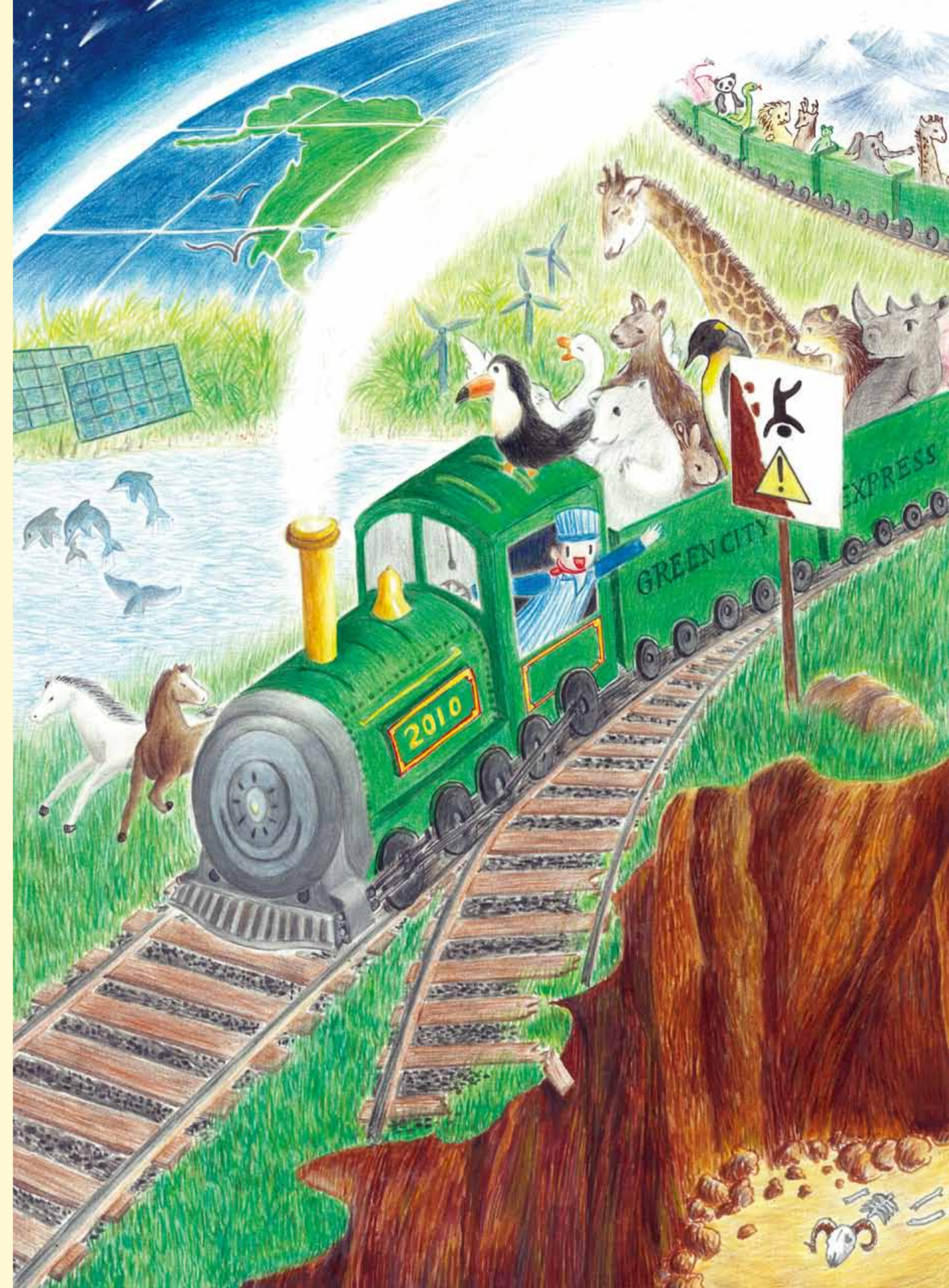
『国連子供環境ポスター原画コンテスト』の応募作品には、世界中の子どもたちの、地球、環境、自然を大切にしたいという強い思いが込められています。その共通の思いは、地域、民族、年齢などにより異なる、さまざまな色彩やモチーフで表現されています。この貴重な資料を活用し、人間文化研究機構の「人間文化研究連携共同推進事業」の一環として、わたしたちは『子どもたちがつくる国連環境ポスター展』とワークショップを実施しました。活動の様子をまとめましたのでご覧ください。

総合地球環境学研究所
阿部 健一



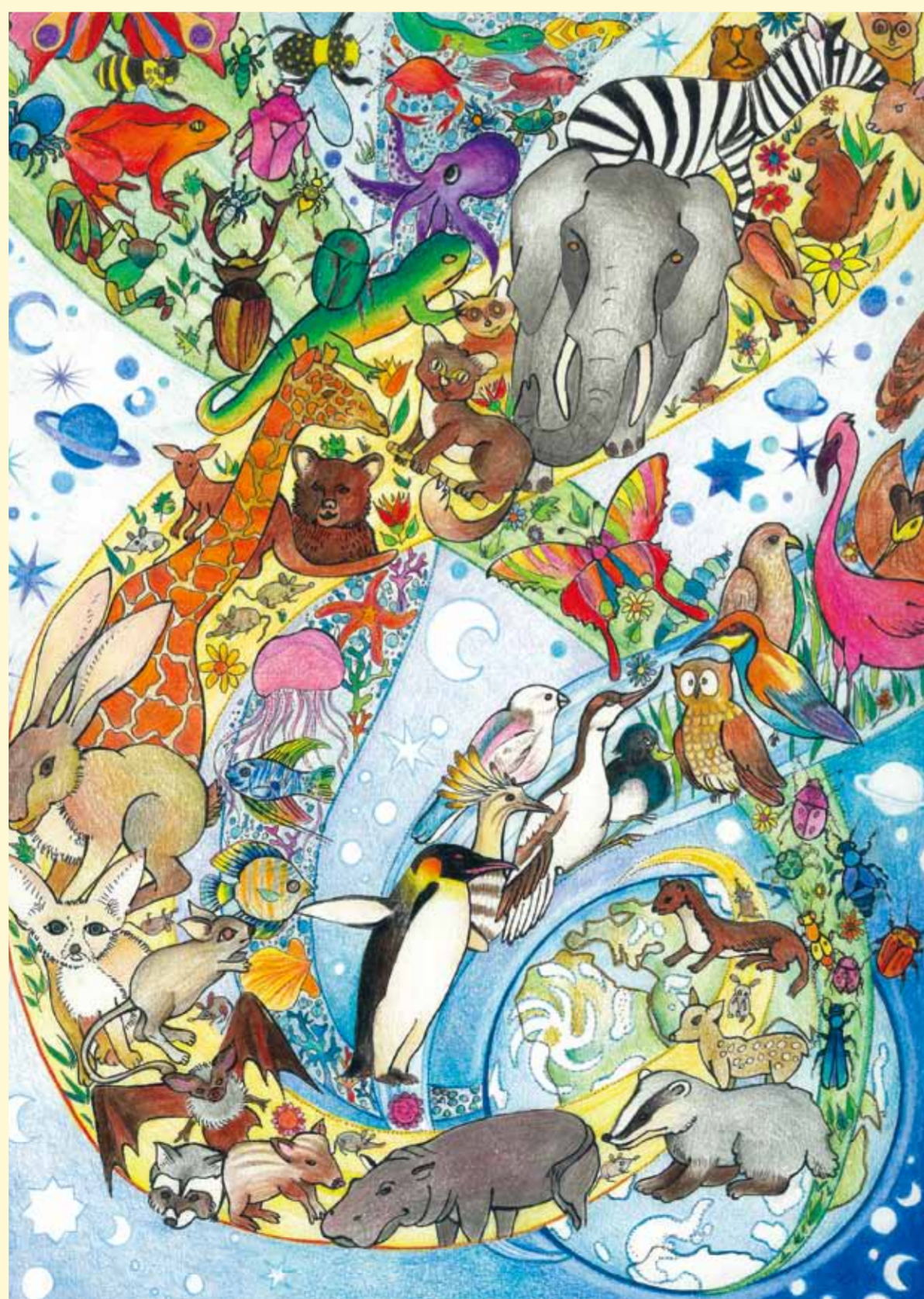
国連子供環境ポスター

『国連子供環境ポスター原画コンテスト』は、国連環境計画（UNEP）、地球環境平和財団（FGPE）、バイエル（ドイツ）、株式会社ニコン（日本）が世界の中学生以下の子どもを対象に行っている事業です。毎年環境問題に関わるテーマを掲げ募集を行い、まず国連の6つの地域事務所（アジア・太平洋、西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中米・南米）で予備選考を行います。その後、上位作品はケニアのUNEP本部、日本、ヨーロッパのいずれかで実施されるグローバル部門の最終審査に臨みます。優秀作は国連のカレンダー・絵葉書等に採用されるほか、世界各地で国連の行う環境に関する催し物の折に展示されています。地球環境学研究所はこの事業の協力機関であり、すでに20万点を超えたコンテストの全応募作はすべて総合地球環境学研究所に寄贈されています。



絵の中に何が見える？

絵の中では何が起っている？



Index

- ワークシート p.6-7
- ワークショップデザイン p.8-9
- 実践レポート@小学校 p.10-11
- ボストン チルドレンズ ミュージアム p.12-13
- みんながつくったカルタで遊ぼう！ p.14-15
- 未来へつなぐメッセージ p.16-17
- Listening Together p.18-19

作者は何を伝えたかったのだろうか？

ワークショップデザイン

出会う、読み解く、伝える

ワークショップのデザインは、総合地球環境学研究所を中心に様々な分野の人たちが集まった研究開発チームによって行われています。それぞれの会場での時間や人数、その場の参加者に応じてカスタマイズし、研究と実践を重ねています。2008年～2009年には、「子どもたちが学芸員となって展覧会をつくる」というワークショップ。2010年は、「子どもたちがポスターの絵を使ってカルタの字札をつくる」というワークショップを行いました。2つのワークショップデザインに共通するねらいは、子どもたちが、「国連子供環境ポスター」の絵に「出会う、読み解く、伝える」という点です。

読み解く

伝える

出会う

1枚の絵をみんなで見る



絵を1枚選ぶ



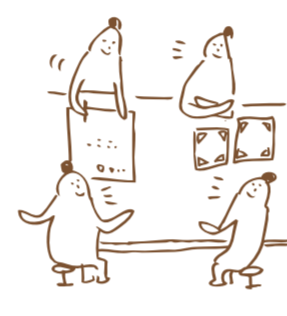
絵と対話する



みんなの読み解きを共有する



学芸員になってみる



伝える言葉を考える



絵にタイトルをつける
キャプションを考える



カルタの文字札をつくる

カルタをつくる

一枚の絵をじっくり見る、自分の読み取りをもとにコミュニケーションするという活動は、鑑賞教育の一手法といえるでしょう。しかし、このワークショップはそれ以外にも、多くの学びの可能性を内包しています。たとえば、コミュニケーション力、言葉による表現力の育成があげられます。また、総合的な学習の時間のテーマとして取り上げられることの多い次の3つの学習に寄与します。

環境教育

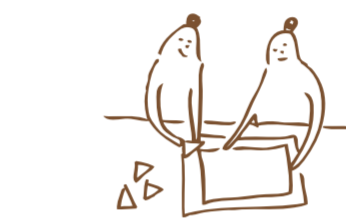
国連子供環境ポスターは、世界の子どもたちが環境について感じたこと、伝えたいことが表現されています。しかし、その読み取りに正解があるわけではなく、また環境について多くの知識を保持することを要求することはありません。絵はどれも、見るものが地球環境についておのずと考えるように描かれており、絵の中の様子をつぶさにみていくことで、誰もが自己の視点で絵の中の出来事を読み取り、メッセージを編むことが可能となっています。子どもたちは、絵の向こうにいる自分と同じ年代の作者の思いを意識し、また第三者へとその思いを伝えるという活動を通して、環境問題を他人事ではなく自分の問題として捉えることができます。



絵の作者の住む町を知る



手紙を書く



展覧会をしつらえる



展覧会をひらく



活動を振り返る



言葉を声に出してみる



カルタゲームをする



情報教育

活動の中には、情報の受け手としての立場、送り手としての立場の双方が含まれており、子どもは、それぞれの立場から絵や社会と向かい合うこととなります。一方的に絵を解釈するだけでなく、その解釈について子どもたちで吟味する機会（グループによる絵の分類）や、描き手に問う姿勢（手紙）を持つことで、情報の背後にある人や社会、また表象の対象となるものへの真摯な姿勢が育まれます。また、情報を受け取り、伝えることの難しさやあやふやさも全てのフェーズの中で感じることができます。

(佐藤 優香)

本カルタワークショップは、The InSEA European Congress 2010 In Ronaniemi, Lapland, Finland, 21-24 Juneでの発表 "Creation Through the Expansion of Words and Images - The Karuta workshop" 内で実施した "The Happy sounds KARUTA workshop" (kazuji Mogi, Chihiro Tetsuka, ほか) から着想を得たものです。(The InSEA European Congress 2010 program and abstracts p.145)

ワークショップで育む環境への感性

「プロジェクト・ワイルド」「ネイチャーゲーム」など、欧米で開発された優れた環境教育、自然体験プログラムは、世界で親しまれています。今日、日本においても環境教育のワークショップは、自然体験学習や小学校でのゆとり教育のみならず、地域づくり・まちづくりの協働のためのツール、エコツーリズム、企業や自治体の研修などで、幅広く活用されています。

「ワークショップ」は新しいカタカナ言葉に見えますが、この原型は日本の実生活の中に見られます。寄り合い、入り会い、地域の祭り、子どもの遊びなど、「上意下達」ではなく、一人ひとりが「ボトムアップ」的に行動や価値観を共有し、集団としての力を発揮する協働の方

法です。今日、社会生活のなかで人と人とのつながりが脆弱化していると言われています。ワークショップとは、自分の考えを受け入れてもらえる信頼感と安心感のなかで他者とつながり、新しい発想や気づきを生み出そうとする、人間の根源的な力と知恵を呼び覚ます仕掛けといえます。

地球環境問題の解決に向けては、グローバルな政策とともに、ひとりひとりの気づきと主体性が必要です。地球研では分離融合の科学的研究活動とともに、社会還元としての環境教育ワークショップを実施しています。(飯塚 宣子)

1948年 国際自然保護連合 (IUPNのちのIUCN) 設立総会
トーマス・ブリチャード "Environmental Education" という用語を使用

1972年 国連人間環境会議 (ストックホルム)
「環境教育」が「環境問題の解決のために必須の活動」

1980年 世界環境保全戦略
「人間だけでなく植物と動物を含めた新しい倫理に適合する心構えと態度を育み強化すること」

1992年 国連環境開発会議 (地球サミット・リオデジャネイロ)
「アジェンダ21をもとに、テサロニキ宣言 (1997年)」
「持続可能性に向けた教育の再構築は、すべての国のあらゆるレベルの学校教育・学校外教育を含む。持続可能性という概念は、環境だけではなく、貧困、人口、健康、食糧の確保、民主主義、人権、平和をも包含し、道徳的・倫理的規範であり、そこには尊重すべき文化多様性や伝統知識が内在」

実践レポート @ 小学校

2010年度は、愛知の日進市立西小学校、奈良の河合第三小学校、石川の金沢大学附属小学校、そして、ボストンのエイトリアムスクールの4校でカルタワークショップを行いました。

子どもたちがつくる 国連環境ポスター WorkShop

※小学校でのワークショップの様子は、神戸芸術工科大学の曾和具之先生を中心とする InfoGuild によって編集されています。

Aichi

日進市立西小学校

2010年8月31日
9:00~14:20
6年生 29名



進行：大西景子

COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）の会場となる愛知県。子どもたちの環境問題への意識の高さを考慮し、絵の読み解きが通俗的な言葉に置きかわらないよう、絵の中の人や動物や物に漫画の吹き出しをつけるという仕掛けをしました。日進市立西小学校は、ぶどう栽培や米づくりなど、児童による栽培活動に力を入れ、食物を育てる経験から環境への思いを育んでいます。当日は小学校からの提案で、地元の食材を使ったエコカレーをつくるチームとカルタづくりチームに分かれました。最後に、この2チームで一緒にカルタ大会を行いました。このワークショップでつくられたカルタ作品はCOP10の会場で展示しました。



ご協力の保護者の中にイタリアンレストランのシェフが！
とっても美味しいエコカレー。

Nara

河合町立河合第三小学校

2010年11月10日
9:00~14:35
6年生 49名



進行：松村佳代

国際理解教育に力を入れる河合第三小学校。奈良県という歴史ある町に住む児童が、世界の子供たちに思いを馳せ、心を込めてカルタの言葉をつくりました。この回のワークショップでは、いくつかの改良を行いました。まず、ワークシートはどこからでも書くことができ、後から書き足すことのできるデザインに変更。また、絵をじっくり見る手だてとして、ワークショップの最初に、目隠しをしているグループの人にむけ、絵の中に見えるものを教えるというゲームを取り入れました。その他、「みるみるフレーム」というツールを使い、小さな穴から絵を覗いてみるなど、絵と自分の距離を最初に近づけるようデザインしました。その結果、子どもたちの絵の読み解きは、知識によるものではなく、絵から自分なりに導き出した素直な言葉となっていました。



ドーナツ盤のレコードのような
かわかしい形をした「みるみる
フレーム」。
穴から覗くと、絵の一部分が
詳細に見えてきます。



Kanazawa

金沢大学附属小学校

2010年12月3日
8:50~12:25
6年生 36名



進行：佐藤優香

昨年度に引き続き、2回目の実施となる金沢大学附属小学校。ワークショップの活動時間が3時間35分と今までに比べ大幅に短く、主要な要素をおさえながら、活動をシンプルにつくりかえました。結果、短時間ながらしっかりと絵を読み解き、ひとり一人が自分のメッセージを込めた1枚のカルタを完成させました。以前から、インドネシア・スラバヤの小学校の子どもたちと共同で絵を描くプロジェクトに取り組んでいる子どもたち。海外の事情への興味が高いように見えました。ワークショップ終了後、子どもたちからスタッフに合唱のプレゼントがあり、世界の子供たちのメッセージと、歌声がホールで呼応し、感動に包まれながらの終了となりました。



Boston

エイトリアムスクール

2011年1月14日
10:00~15:00
5年生・6年生 16名



進行：小林舞

エイトリアムスクールは、創造性や感性に対する教育に重点を置く、自由な校風の小学校。そんな教育を受けている子どもたちは、世界の子供たちが描いた絵と、日本の伝統的なカードゲームであるカルタに興味津々。カルタの文字札を発表した子どもに「なぜ、この言葉を書いたの?」と聞くと、とても詳しく自分の気持ちを語ってくれました。その姿は自分の考えを持っている自立した大人のよう。けれども、カルタゲームがはじまると、誰もが子どもらしく夢中で遊んでいました。ゲームに白熱する姿は、万国共通のようです。



今回のワークショップと表現や環境教育についてディスカッションする、エイトリアムスクールの先生方と開発スタッフ。この日はボストン在住の上田信行先生が応援に駆けつけ、インタビューを務めてくれました。





ボストン チルドレンズ ミュージアム

January 16th, 2011

Environmental KARUTA

ボストン チルドレンズ ミュージアムには、日本文化に自然に親しむことが出来る仕掛けがたくさん用意され、毎年恒例の「お正月イベント」には数千人の方が笑顔で遊びに来られます。獅子舞、和太鼓、墨流し、お餅つき、茶道、福笑い・・・そのコミュニティの育みに「つながり」を一つのテーマとするカルタ・ワークショップが、リスペクトをもって参加できたことはとても得難い体験でした。ひとり一人がつくったカルタがイベントの最後には2つのカルタセットになりました。

世界の子どもたちの絵に 名前をつけよう。

ボストン チルドレンズ ミュージアムと日本

ボストン チルドレンズ ミュージアムは、世界で二番目につくられたチルドレンズ ミュージアムで、その歴史は古く、百年をむかえようとしています。体験をベースにした展示のありかたは、マイケル・スブック氏が1962年に館長になったことが契機となり形づくられていきました。これは、世界中のチルドレンズミュージアムに拡がり、日本の多くの体験型の博物館もその影響を強く受けています。日本との関わりは古く、1928年に京都の仏教家からボストンの親日家に、日米親善の遺品として贈られた雛人形が今もミュージアムに保存されています。本ワークショップでカルタゲームを行った量の部屋は、ボストンと姉妹都市である京都から1971年に移築された町屋の一部です。日本についての展示は、常設の町屋だけでなく、Teens Tokyo や Five friends from Japan など現代の日本の子どもの生活をテーマにしたものも企画開発されています。
(佐藤 優香)



LOOK

国連子供環境ポスターの原画をコーナーに展示。まずは原画の美しさに触れてもらいました。



CHOOSE

ポスターの絵が印刷されたカードを用意。100枚のカードから好きな絵を選んでもらいました。選んだ1枚の絵はお土産に持ち帰ることができるので、みんな選ぶ目が真剣です。



GAME

ミュージアム内にある「京の町家」の座敷で、カルタ遊びを行いました。ここでは、日本で行ったワークショップで子どもたちがつくったカルタをもとに作成した英語版のカルタを使用しました。



SHARE

壁に貼られた A から Z までのアルファベットボード。穴埋めゲームのように、自分の書いた文字札と選んだ絵札を、このアルファベットボードに貼ってもらいます。



NAME

選んだカードの絵をよく見て、絵に名前をつけてもらいました。これが、カルタの文字札になります。



みんなでひとつのカルタができました。



このカルタは、ボストンのエイトリアムスクールの子どもたちが、ワークショップの中でつくったカルタセットです。

わ みんなが救おう この自然	ら ららららら びんの中で 笑う動物	や 地球の動物 増やそうよ	ま まがいで 自然の海を とりもどせ	は はれり地球を グリーンな未来へ つなげて	な なせこころ？ ライトでさす みんな世界	た たくさんの 動物を 海賊船	さ さなわそう 美しい自然を とりもどす	か かながえて アロウを 立ちまわす	あ あくまの 人回りが 地球を のびまわす
り りそうまで 泣きやまない	ゆ ゆめいばい さのせて 理想花	み みの手で ついで この地球	ひ ひららら ほいあや 花を	に にぎやいめ 生き物 笑顔あり	ち ちきうが太陽 光を集めて わかちあう	し しぜん 大好き 々人組	き きのした ごう 目が光る	い いぎもち へいわ ローラー	う うれいぬ まごころ 幸せ
る るすばんだ でんごに つが	ゆ ゆくりと たくさんの 歩いてる	む むこう ついで この地球	ふ ふわわと 明る 未来	ぬ ぬくもりが 伝わる ピラミッド	つ つかみ 自然の はめな	す すばらしい 光る 地球を	く くしや 自然が あま	う うれいぬ まごころ 幸せ	う うれいぬ まごころ 幸せ
れ れつづくる 動物か エコ	ゆ ゆくりと たくさんの 歩いてる	め めが 広い 宇宙	へ へら パイ 地球	ね ねを はら 実	て てくてくと 理想 道	せ せかい みんな かさ	け けん 取り 大自然	え えか みんな ま	え えか みんな ま
ろ ろく は ま	よ よる 光 あ	も もこ は どう	ほ ほえ 枯 世	の のこ きれ 世	と とべ 短 と	そ そう の 水	こ この 四季 夢	お お その つ	お お その つ



A nimal Trees with the Sun and the wind are full of harmony and happiness	B Our holiday ambrella, full of life almost as if we were Great things fall and strong watching over everyone.	C hey now there, children help the Earth, alongside critters.	D Desons ve Pounders Meerahnberg	E Xotic birds and plants by the river	F Friendly Should Left Please	G owing the World, Opening up and bringing us together.	H elping the animals and is a good change	I magine our world, as a giant puzzle. We all have a piece, So we can choose to leave it out or put it in place.
J ust a scene to be painted over, as good as dead, forests burning, burned to a happy land by a single brush stroke of the hand.	K indness to earth, the animals live in peace By the water	L ove the world. We are all connected.	M ust make world better and the animals so they brush and they are the world happys	N o pollution Shakes with funny	O Clean from the dirty or with no saved!	P ollution The picture is a TLC was the best!	Q ickly they dive, but the smaller fish fly.	R ocks Covered in shadows, plants, made into a painting on the folds, 4 wonderful people.
S ail with the wind, the earth in our boat	T elling a story of peaceful Sharks swim!	U nder the sky, covered in the four seasons Animals in peace.	V arious birds and various flowers the eye devious.	W hales like Dolphins, Live in the beautiful sea. Take care of the world.	X hophone of colors, makes the world bright	Y oung biggs down to streets of peace.	Z The knows the stars from the stars	

みんながつくった カルタで遊ぼう！

子どもたちが絵を読み解き、つくったカルタです。字札を声に出して読み、誰かと一緒に絵札を探してみてください。

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」
ワークショップの歴史と展示

未来へつなぐメッセージ

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」のワークショップは、2008年より本格的にスタートし、多くの子どもたちが活動に参加しました。子どもたちがポスターから感じ取った作品や活動が、多くの展示会場やプレスによって紹介されました。

History

2001
ワークショップ
「わたしたちの地球：世界子ども環境ポスターの語りかけるもの」
(日本生命財団研究助成)
松山市立桑原小学校児童を対象に、愛媛大学附属高等学校にて開催

2000
原画コンテスト応募作品を国立民族学博物館へ
寄贈の覚書締結

1992
第2回国連子供環境ポスター原画コンテスト開催
(地球環境平和財団、UNEP主催)、コンテストは以降毎年開催

1991
地球環境平和財団 (FGPE) 設立
第1回国連子供環境ポスター原画コンテスト開催
「21世紀に残そう！美しい海・空・森」
UNEPとともに国連本部に優秀作を展示

1972
UNEP (United Nations Environmental Programme) 設立

2008
国連子供環境ポスター原画を国立民族学博物館より、
総合地球環境学研究所へ移管

第1回「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」
ワークショップと展示を立命館小学校にて開催

2006
(株) ニコン 第15回原画コンテストに参画

2005
BAYER 第14回原画コンテストに参画

2008年3月17日
国連子供環境ポスター
グローバル部門審査会
会場：国際文化会館、六本木



子どもたちがつくる世界
環境ポスター展チラシ



「日本発 21世紀型教育モデル」
荒木貴之 (立命館小学校副校長) 著
本文中で取り組みが紹介される

KYOTO

2003年3月16日～23日
「第3回世界水フォーラム」
ポスター原画展示
会場：国立京都国際会議場
国立民族学博物館ブース



TURKEY

2009年3月16日～22日
「第5回世界水フォーラム」
連携展示ポスター発表
会場：トルコイスタンブール
総合地球環境学研究所ブース



2009

第2回 ワークショップと展示を
金沢大学附属小学校にて開催

KYOTO

2009年2月11日
「子どもたちがつくる世界環境
ポスター展」
会場：立命館小学校

2009年2月8日
「京都新聞」に掲載



KANAZAWA

2009年5月4日
国連子供環境ポスター
グローバル部門審査会
会場：UNEP本部
ケニア、ナイロビ



2010年2月6日
地球研地域連携セミナー
「にほんの里から世界の里へ」
同時開催
会場：石川県立音楽堂邦楽ホール



金沢大学附属小学校による
「かしわコンサート」同時開催
会場：石川県立音楽堂
コンサートホール

2010年2月3日
北国新聞に掲載



金沢大学附属小学校での
ワークショップのレポート冊子



「かしわコンサート」チケット

NAGOYA

2010年5月26日
国連子供環境ポスター
グローバル部門審査会
会場：総合地球環境学研究所
講演室



2010年10月23日～29日
COP10 生物多様性交流フェア
会場：名古屋国際会議場
エキスポゾーン



2010年10月10日
地球研地域連携セミナー
「多様性の伝え方」同時開催
会場：名古屋大学豊田講堂



2010年10月24日
国際子ども環境会議
コンテスト表彰式
会場：名古屋市ナディアパーク



京都大学生態学研究所ニュースレターで
取り組みが紹介される



2010年10月14日
日進市立西小学校の子ども
たちが、修学旅行で地球研を訪れ
「MIDORI-繋がる輪～」を合唱。
また、英語・日本語・中国語で環
境への思いをスピーチ。
会場：総合地球環境学研究所
エントランス



NARA

2010年11月19～20日
会場：河合町立文化会館
(まほろばホール)



BOSTON

2011年1月16日
会場：ボストン チルドレンズ
ミュージアム



KANAZAWA 国際生物多様性年クロージング・イベント連携展示

2010年12月14～15日
国際シンポジウム
「里山と多様性」同時開催
会場：しいのき迎賓館

2010年12月14日
MRO テレビニュースで放送

2010年12月15日
北陸中日新聞朝刊に掲載

2010年12月16日
毎日新聞朝刊に掲載



2010年12月16～18日
会場：ANA クラウンプラザ
ホテル金沢



2010年12月19日
「国際生物多様性年記念シンポ
ジウム」で展示
会場：石川県立音楽堂
邦楽ホール



2010年12月19日
金沢大学附属小学校児童が
「地球いきもの広場」で発表
会場：石川県立音楽堂
交流ホール



ECCジュニア広報誌「ハーモニー」
にワークショップの様子が紹介され
ました。

2011

第6回 ワークショップを
米国マサチューセッツ州
エイトリアムスクールにて開催

第7回 ワークショップを
米国マサチューセッツ州
ボストン チルドレンズ ミュージアムにて開催

Exhibition

Listening Together

ワークショップ開発メンバーの師であり、ブレインフルーニングの提唱者である上田信行先生を囲み、今回のプロジェクトにおける学びの本質について、様々な立場から語り合いました。

2011年1月16日 マサチューセッツ工科大学メディアラボにて

上田 信行（マサチューセッツ工科大学 客員教授）
田中浩也（慶應義塾大学環境情報学部 准教授 FabLab Japan）
五月女 賢司（国立民族学博物館 研究員）
原田 泰（千葉工業大学 准教授）

阿部 健一（総合地球環境学研究所 教授）
佐藤 優香（国立歴史民俗博物館 助教）
飯塚 宜子（総合地球環境学研究所）
大西 景子（BOX & NEEDLE）
三宅 由莉（trois maison）
小林 舞（京都大学大学院地球環境学舎）
曾和 具之（神戸芸術工科大学 准教授）

審査会の楽しさを

阿部：このプロジェクトをはじめようと思ったきっかけは、「国連子供環境ポスター原画コンテスト」の存在です。全応募作が2008年に僕の所属する総合地球環境学研究所に寄贈されました。世界の子どもたちが描いたポスターを倉庫に眠らせておくのは、あまりにも勿体ない。毎年、僕はこのコンテストの審査会に出ますが、それがとても楽しい。審査員はたくさんの絵の中から好きな絵を選んで、その絵のどこがいいのかということまで話し合います。なぜこの人はこんな絵を選ぶのか最初はわからないけど、説明を聞くとなるほどと思う。こういう意見の交換が楽しい。こんな楽しいことを子どもたちにも体験させてあげたいなと思い、ワークショップの実践を多くされている佐藤さんに相談したんです。

三宅：つまり、このプロジェクトは宝の発掘作業なんですね。倉庫に眠っている世界の子どもたちのメッセージを発掘したい。そして、絵をみる子どもたちの中にある潜在的な読み取り、発信する力を発掘したい。この両方があるように思います。

阿部：そう、それを宝だと思う人がいないと宝に見えないものなんです。僕たちは宝を見つけた！だから、これが宝であるということ、みんなに伝えたくて、こんなプロジェクトをやっているんですね。

目的は一つではない

上田：このプロジェクトのミッションは、大きく2つありますね。一つは環境というテーマを子どもたちにどのように伝えていくかということ。もう一つは、オブジェクトを媒介にして物事を深く見るという楽しさみたいなものを伝える。ということです。しかし、2つのミッションは並列ではないんですね。環境教育というのは教えられるものではなく、自分自身で感じとっていかないといけないものです。Passive learning受け身な学びではなく、makingな学び、表現して語っていく。語ることを通して理解していくという学びのスタイルでしか環境のことを伝えていくことはできないと思います。

ワークショップでは、曾和先生たちのチームがRTV（リアルタイムドキュメンテーション）*で刻々と起る出来事を映像に残して、最後にこれを見てふりかえってもらいましたね。これは、何かを教えるためのものではなく、その場で起きていた出来事を語りなおすためのオブジェクトなんです。子どもたちが描いたポスターもこれと同じなんじゃないかな。

阿部：なるほどね。このプロジェクトは、環境教育だけじゃなくて、世界の子どもたちが描いた絵から民族性を感じ、それが異文化理解につながるのではないかと、絵をよく見るということから美術鑑賞教育になるのではないかなど、いろんな教育のミッションを掲げることができる。ただ、僕はこのどれかだけで語るものではないなと感じていました。

佐藤：それは、このプロジェクトが一つのコンテンツだけを習得するというものではないからですね。絵か

ら環境のことを学びなさいというのではなく、絵を使い、絵という情報を読み、そこから自分を通して言葉にしなおす、ということが活動の本質です。ワークショップ後の子どもたちの感想をみると、そこから子どもたちは、同時多発的に、さまざまなことから学び取っているのが分かります。それは結果的に「環境」について学べていたり、結果的に「異文化理解」について学べていたりということであって、そのどれか一つが目的ではないんですね。いろんな目的を内包しているからこそ、ワークショップを実施する学校によって、どこにフォーカスをあてるかを変化させることができるんです。例えば、第一回目の立命館小学校では、子どもたちが環境についての取り組みをしていたので、「環境」に焦点をあてて活動をデザインしました。また、金沢大学附属小学校では、担当された先生の研究テーマと子どもたちの一年の取り組みを鑑み「メディアリテラシー」を念頭においてデザインしています。ポスターを読み解き各自がメッセージを発していくことを基本にしながらも、参加する子どもと先生の関心や学習内容によってワークショップのデザインを変え、学びを発展させることができるんです。

「Good」の研究

上田：ハーバード大学では、「Good」の研究が非常に盛んです。全ての教育の目的は結局「Good」「Good Person」「Good Worker」「Good Citizen」をつくることだと言っているんです。このプロジェクトも、これぐらいの次元のところまで一つのキーワードがあるといいですね。「Very Good」って言葉をアメリカにいるとすごくよく耳にします。

小林：「Very Good」という言葉には、あぶない側面がある気がします。ワークショップの途中では、いろいろ自由に語ってた子どもが、いざカルタの言葉としてカタチにしていくと「Very Good」って言ってもらえるように意識して書いているように思います。

阿部：絵としてきっちり描かれているものを選んだ子もいるし、なんでこんな選んだのかな？と傍目に見ていると思うこともあります。それは、僕にとっての「Very Good」、彼、彼女らにとっての「Very Good」がやっぱりあるっていうことかもしれない。

小林：アメリカの方が子どもたちにとっての「Very Good」の幅が日本より広いような気がします。日本の方がいわゆる「上手な絵」を選ぶ子が多くて、アメリカの子どもの方が子どもらしい絵を選ぶことが多いです。

田中：アメリカは、気軽に「Very Good」という言葉をかけるからですかね。こちらにいると本当にみんなよく「Very Good」って言うんです。

五月女：どんな時にも「Very Good」では、僕は嬉しくない。でも、自分が頑張って、こはは褒めてほしいって思う場面ではやっぱりきちんと褒めてほしい。私たちは社会性のある生き物ですから。

佐藤：「Very Good」という言葉は、慎重に使わなければ、大きな誤解を生む可能性があると感じています。私はワークショップで子どもと関わる時に「うまいね」という言葉を絶対言わないようにしています。「うまい

ね」も「Very Good」ですよ。このプロジェクトは人からの評価ではない言葉で、説明したいと思うんです。

キーワードは「Listen」

佐藤：このプロジェクトを一言であらわすとしたら「Listen」でしょうか。ワークショップのデザインをするときに大切にしてきたことや、子どもがグッと伸びる部分を一言でいうなら、「Listen」、聞くということにつきると思います。さきほど、ワークショップで子どもたちから最終的に出てきた言葉が、他者から「Good」と評価されるようなものになっていたのが残念だという話がありました。日本での実践でも同じことを感じます。たくさんのやりとりをし思考を重ねたのに、最後に文字にしたときには型通りの答えみたいになってしまうことが多くありました。けれども、ワークショップが終わってから子どもたちに書いてもらったふりかえりのシートには、「こんなにじっくりと一枚の絵を見たことがなかった」「世界の遠くの国の子どもも自分たちと同じようにいっぱい考えているんだと思った」「絵って伝えることができるものなんだ」などのコメントがたくさんありました。まとめようとして出された表現には、学びは見えてこない。すべてはプロセスの中に十分ふくまれていて、それはくりかえされる「Listen」にあったのだと実感します。

田中：「Listen！」すごく賛成です。作る側から考えてみても、受け止めてくれる人がいるという信頼感が重要ですよ。僕の場合は表現を支援するテクノロジーをつくる分野にいますが、表現を支援することはできても、つくった物を受け止めてくれないとか、誰もみてくれない。そんな悲しさが少なくてきているんです。

佐藤：このワークショップでの活動は「表現」からではなく「鑑賞」からスタートしています。まず自分が受け手になるということがこのワークショップのいいところだと思っています。表現の支援として鑑賞があり、鑑賞の支援として表現があるんです。**大西**：私の研究テーマは、まさに「Listen」なんです。「聞く」というのは相手を思いやる想像力があることなんですね。ただ耳を澄まして聞くのではなく、そこには想像力があるんですね。想像力、それは表現ですよ。聞くこと自体が表現なんだと思います。

阿部：「聞くこと自体が表現」というのは大事にしなければならぬ考え方。僕らはい結果だけを見てしまふけれど、むしろ見せたいのは結果だけでなくそのプロセス。プロセス自体をどう見せるか？結果だけ判断してのVery Goodではないということかな。

関係性の中での「Listen」

上田：僕は「Listen」の次の可能性は「Listening Together」といったような社会的なものにあると思っています。Listenというのは一人で聞くのではなく他者が聞いているのを聞き、また他者がどう聞いてくれているか聞く。発達心理学の研究で「共同注視」というのがあり、向き合っていた母子関係から、同じ

ものを一緒に見るという関係に変化してくるんです。このワークショップでも、絵を一人で見るとはなく、みんなで見るわけですよ。同じ絵をいろんな人が見ている。他者との多様性の中で聞くというところがおもしろいと思うんです。絵がみんなを結びつける「触媒」のような働きをしているんですね。

阿部：触媒には英語で「Catalyst」と「Mediator」の二つの言葉があります。僕は二番目の「Mediator」って言葉に注目しています。上田先生の言う「結びつける」「つなげる」ってことですね。今の社会はいろんな「つながり」が切れている。これをあらためてつなげるって作業を誰かがしなきゃいけないって思っているんです。つなげること、結びつけることによって新たな価値が生まれる。僕はそれを「関係価値」*と呼んでいます。現代社会の中で知らないうちに失っている価値です。昔は当たり前につながっていたものが今は切れ端も見えない。「食」なんかでもそうですね。昔はつくった人の顔が見える関係でした。あのおばちゃんがつ作ったコロッケは美味しい、とかね。そういう関係が遠くみえなくなってしまうことで不安になっている。今はよその誰か知らない人のつくったものを僕たちは口にしている状態です。食に限らず、こうして失ってしまったつながりを再び結び、あるいは見えるようにするのが「Mediator」だと思います。

上田：僕は、イヴァン・イリイチ*の言う「Convivial Environment」をくりたくて学びの環境づくりの研究を行っているんです。同僚はこれを自立共生と訳しました。つまり一人ひとりが立つとともに生きる。自立している個人がいる中で、共に何かをつくっていくことがすごく楽しいし、それが本当に楽しい社会をつくっていくんだと。

佐藤：このワークショップのデザインも、まさにそうになっていて、一人ひとりが1枚の絵をじっくりと見て読み込んでいるから次の議論で私の選んだ絵はこうなんですって語るができるし、それが楽しい訳です。

※イヴァン・イリイチ

イヴァン・イリイチ (Ivan Illich) (1964-2002)は、オーストリア、ウィーン生まれの哲学者、社会批評家。1970年代以降『脱学校の社会』、『脱病院化社会』、『シャドウワーク』などを含む著書を断続的に出版し、現代産業社会批判家として有名になった。近代の制度化された教育、医療制度や、エネルギー利用の非生産性は、人間の創造性と友好関係を損害し不能化すると批判した。イリイチの概念はフリースクール、生涯教育運動の中で、指導的な理論となった。

(小林 舞)

※ RTV (リアルタイムドキュメンテーション)

リアルタイム・ドキュメンテーション (Real Time Documentation) は、その場での出来事をその場で編集し、全員で共有する、新しい記録システムです。自分は何をしてきたのか、他の人とどんな風に関わりを持ってきたのか、そして、全体として何が起こったのか。その時、その場で得た体験をすばやく、かつ、みんなで共有することで、全く新しい体験の記憶が生まれてきます。

(曾和 具之)

※ Fablab

「ファブラボ」とは、3次元プリンタやカuttingマシンなどの工作機械を揃えた、誰もが使える、オープンな市民工房です。既に世界16カ国以上40か所以上に設立されて、国際的なネットワークになっています。ファブラボの目的は、「大量生産・大量消費」「生産者と消費者の分断」といった20世紀型ものづくりの行き詰まり・限界を見据え、新しい「つかうひとが自らつくる社会」への脱皮と移行を促すことです。

(田中 浩也)

※関係価値

つながることによって豊かになる価値。あるいは、つながりが切れてしまつてあらためて気付くことになる価値。「交換価値」や「使用価値」のように説明概念として考えてみた。物質的に豊かになり、便利な社会となってきた。しかし何か喪失感がある。その失っているものこそ、社会のさまざまな局面での関係性ではないだろうか。関係価値と名付けることで、これまでに気がかけてこなかった、つながっていることの価値を再認識できたらと思う。

(阿部 健一)

「Listen」＝「表現」

佐藤：私がさきほど言ったこのワークショップでの「Listen」とは、「make meaning＝意味をつくること」だと思います。鑑賞だけだと、表現であって、クリエイティブな行為だと考えます。

上田：「Listen」しながら、僕たちはずっと meaning construction している。聞きながら意味を作り、意味づけながら聞いている。そういうプロセスの中にいるわけですね。

田中：僕たちのモノづくりの分野で言う「Maker」に対して「User」なんですよ。作る人にたいして使う人って考えるんですよ。FabLab*の場合はまず自分のほしいものを自分で作るというのが、そもそもの始まりで、つまり、「User」が「Maker」になろうというわけですね。

阿部：「User」が「Maker」という考え方は大事だと思う。イタリアのスローフードでも、消費者 (Consumer) が生産者 (Producer) という考え方をしています。消費者ではなく、共同生産者 (Co-producer)。生産者と消費者を分けることによって、その間が次第に遠くなってきて無関係になっていく。つながっていないことが問題です。意識の上では、消費する側も生産する側の一部だと思うことが大切です。

田中：絶対テクノロジーでできないものの一つがこれ、「Listen」ですよ。この部分はサポートできない。表現はサポートできると思うんですが。

三宅：私も以前「Curator」という、鑑賞を支援するためのコンピュータソフトを上田先生のもとで開発しました。田中さんの言うようにテクノロジーで支援している部分は表現なんですね。けれどもその表現を支援することで自ずと鑑賞が深まっていく。鑑賞と表現のサイクルをうまくまわしてあげるシステムはつくれるんですね。

飯塚：このワークショップを始めた時にいろんな小学

あとがき

世界の子どもたちの思いが詰まった「国連子供環境ポスター」に引き寄せられるように、多くの人たちがこのプロジェクトに参加しました。様々な専門分野のスタッフが集まり、ワークショップのデザインを試行錯誤していく中で、新しい「意味」が生まれ、また実践を通して、子どもたちから多くのことを気づかせてもらえました。思い返せば、スタッフ自身がこのプロジェクトを通してワークショップによる学びの活動を行ってきたように思います。これからもネットワークや繋がり、活動の意味を広げていきたいと思っています。

(飯塚 宜子)

【問い合わせ】 総合地球環境学研究所

info@chikyu.ac.jp 075-707-2100 (代表)



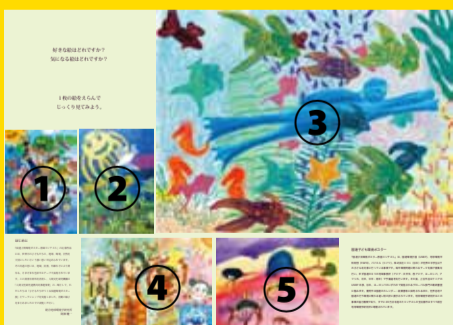
エイトリアムスクールの子どもたちとスタッフ一同

Listening Together

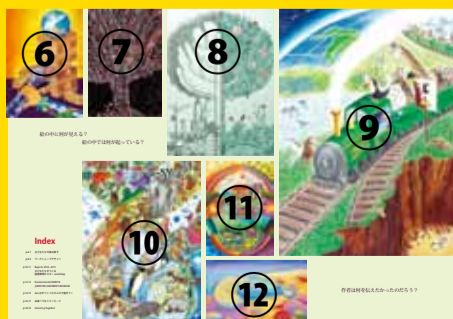
CAST

研究代表	阿部健一（総合地球環境学研究所）
ディレクター	飯塚宜子（総合地球環境学研究所）
ワークショップデザイン	佐藤優香（国立歴史民俗博物館） 大西景子（BOX & NEEDLE） 小林舞（京都大学大学院地球環境学舎） 松村佳代（Learning Designs）
ラーニングデバイスデザイン	三宅由莉（trois maison） 大西景子（BOX & NEEDLE） 菊地薫（総合地球環境学研究所）
ファシリテーター	五月女賢司（国立民族学博物館） 手塚千尋（兵庫教育大学大学院連合） 西橋悦（Learning Designs）
ドキュメンテーション	曾和具之（神戸芸術工科大学） 柴田あすか（神戸芸術工科大学） 田中恵利香（神戸芸術工科大学）
ドキュメンテーション協力	原田美佳（Learning Designs） 原田一利（clayball） 原田泰（千葉工業大学）
イラストレーション	夏目奈緒子
展示管理・事務局・ウェブ管理	菊地薫（総合地球環境学研究所） 藤田香菜子（総合地球環境学研究所） 梶原雄太（総合地球環境学研究所）
アドバイザー	上田信行（マサチューセッツ工科大学 客員教授） 秋道智彌（総合地球環境学研究所 副所長） 吉田憲司（国立民族学博物館 教授）
協力	新谷裕（愛知県日進市立西小学校 校長） 江崎啓史（愛知県日進市立西小学校 教諭） 桜本直三（奈良県河合町立河合第三小学校 校長） 岡田明代（奈良県河合町立河合第三小学校 教諭） 井原良訓（金沢大学附属小学校 校長） 山下尚（金沢大学附属小学校 副校長） 中山信之（金沢大学附属小学校 教諭） Susan Diller（米国マサチューセッツ州 エイトリアム小学校 校長） Liuda Echt（米国マサチューセッツ州 エイトリアム小学校 校長） Nicole Nataro（米国マサチューセッツ州 エイトリアム小学校） 茶山明美（ボストン チルドレンズ ミュージアム） 横山智（名古屋大学大学院 環境学研究科 准教授） 稲村哲也（愛知県立大学 多文化共生研究所 所長 教授） 石川県企画振興部 国際生物多様性年クロージング・イベント開催実行委員会 ANA クラウンプラザホテル金沢 総合地球環境学研究所 研究推進戦略センター (CCPC) 総合地球環境学研究所 COP10 ブース担当スタッフ

p.2~5 で紹介した「国連子供環境ポスター」を描いた子どもたちの名前と住む国。あなたが選んだ1枚の絵の作者と住む国を思い浮かべてみてください。



- ① Enrique Suarez Estrada (メキシコ)
- ② Ceren Sahin (トルコ)
- ③ Sablina Koppensteiner (オーストリア)
- ④ Mahta Esmailpour Bazzaz (イラン)
- ⑤ Lenina Lebarikiya (ケニア)



- ⑥ Coco Tin Chi Ting (香港、中華人民共和国)
- ⑦ Sanela Redzic (ボスニア・ヘルツェゴビナ)
- ⑧ Artem Katikalo (ロシア)
- ⑨ Katherine Z.Liu (アメリカ)
- ⑩ Hanna Gall (ハンガリー)
- ⑪ Jerrika C.Shi (フィリピン)
- ⑫ Anzhelika Shabaltus (ベラルーシ)

子どもたちがつくる国連環境ポスター展 Workshop
Listening Together
地球への感性 創造的な鑑賞による学びの実践

編集：飯塚宜子 三宅由莉 佐藤優香
デザイン：三宅由莉 trois maison
英語版翻訳：小林舞
発行：総合地球環境学研究所
発行日：2011年3月31日